

聖杯ロマンスにおける隠者について

植 田 裕 志

中世騎士道ロマンスではしばしば隠者 (ermite) が登場する。冒険を求めて深い森に分け入り馬を進める騎士は、日暮れともなると夜露をしのぐ宿をさがす。その時、折りよく行く手に隠者の住まいが見えてくる。隠者は相手が遍歴の騎士であるとわかると、快く歓待する。甲冑を脱いでくつろいだ騎士に食事をもてなし、寝床を与え、馬の世話も引き受ける。翌朝、騎士は隠者の朝の勤めに加わって、神に感謝し、神の加護を祈る。こうして身も心も新たに騎士はまた冒険の旅に出発するのである。

隠者の登場や隠遁生活への言及は時代とジャンルを問わず中世フランス文学において広く見られるものである。『聖ブランダン航海記』(1120頃)ではブランダンは航海の終わりに、当時隠者の始祖と考えられていた聖パウロス(テーベのパウロス)の住む島を訪れる⁽¹⁾。武勲詩の一つ『ギヨームの修道院時代』(12世紀)では、ギヨームは武具を捨てて修道院に入り、さらに神の命に従って荒地へ赴く⁽²⁾。『新作狐物語』(1288年)では俗界の聖職者、修道院の修道士に対して、隠者こそ神に最も近いものとして讃えられる一方⁽³⁾、『新百物語』(15世紀中頃)の第14話では他の聖職者の不品行と共に、奸計によって町の娘を誑かす隠者の悪事も槍玉にあげられている⁽⁴⁾。

ブリタニアものでは初期のマリ・ド・フランスの『エリデュック』(1170-1180)、ペルールの『トリスタン』(1160以後)から登場している。エリデュックは死んだと思った不義の恋人を密かに弔うための場所を思案したとき、旧知の森の隠者に思いあたる⁽⁵⁾。トリスタンはモロワの森でのイブーとの逃避生活をやめて宮廷へ戻ることを決心すると、隠者オグランにマルク王へのとりなしを請う⁽⁶⁾。こうした騎士の補助者、助言者としての隠者の性格はクレチアンの作品で決定づけられる。『イヴァン』(1170頃)では、恋人を失って狂人、野人同様となったイヴァンに、彼の持ってくる獲物と引換えに、パンと水を与え続け、精神的回復のきっかけをあたえるのが森の隠者である⁽⁷⁾。『ペルスヴァル』では漁夫王の城での失敗の後、神を忘れて戦いに明け暮れ、正気を失っていたペルスヴァルは彼のおじである隠者に会って自らの非を悟り、そこで悔俊の業に勤めることになる⁽⁸⁾。

このような森の隠者は13世紀の散文ロマンスにあっては物語の背景の一部として定着した観がある。騎士道ロマンスにおける隠者の役割とその分類についてはすでにイギリスものではウィーヴァー(Weaver)⁽⁹⁾、フランスものではケネディ(Kennedy)⁽¹⁰⁾の研究などがあるが、ここでは隠者という存在の本来的な曖昧さから検討しなおした上で、聖杯探索を主題とした二つの散

文ロマンズ、『聖杯探索の物語』⁽¹¹⁾と『ペルレスヴォー』⁽¹²⁾を取り上げて、冒険の世界における隠者がその存在によってどのような意味を持ち、また騎士道の理念とどのように関わるのかを見てみたい。

曖昧な存在

俗世との交わりを絶って生活するものを呼ぶのにフランス語では語源的に「砂漠ないし荒地に住む者」を意味する *ermite*、「隠れ住む者」である *anachorète*、あるいは「僧院などに籠もる者」*reclus* がある。また共住生活を送る修道士は *moine* または *frère* である。この用語は必ずしもその生活の実態を明確に区別して使われているわけではない。*moine* という語も語源は「独りで暮らす者」である。*reclus* と呼ばれる者は孤住生活を送っている場合もあれば、修道院にいる場合もある。本稿では独居生活を送っている者を隠者とよぶが、しばしば同じ役割を果たす修道士も広い意味での隠者として考察の対象に入れるものとする⁽¹³⁾。

隠者の実態の曖昧さ、多様さはさまざま要因による。そうした要因は互いに関連する場合が多いであろうが、それらを列挙してみよう⁽¹⁴⁾。まず、俗世から逃れ、他者と没交渉であるがゆえにその生活実態、歴史的事実を知るのが困難である⁽¹⁵⁾。しかも、実態が不明であるがゆえに、俗世の側ではたとえば隠者崇拜という形で隠者に対するイメージが形成され、伝承される。第二に俗世からの離脱の動機と意識が多様である。一方では反体制者や犯罪者のような世俗権力からの逃亡、ないし単に俗世での敵対者からの逃亡といった消極的な離脱があり、他方では自己の生活のすべてを神に捧げることを選択する積極的な離脱がある。第三には離脱の場所と期間がさまざまである。場所としては町の中で隠れ住む場合もあるが、町から離れて荒地や山、森林、離れ島に住む場合が多い。また一生孤独な生活が続ける場合もあれば、それが一時的な場合もある。第四に孤独の程度である。孤独の形態としては徹底した孤独生活（孤住）、起居は別にしながらも志を同じくする者と時おり言葉を交わすような生活（集住）、さらには同じ建物での共同生活（共住）とを区別できる。最後に社会における位置が問題になる。俗社会から離れながらも、いやそれゆえに逆説的に社会にとっての役割を果たす場合があるからである。実用的には未開地の案内人、宿の提供者、開墾者となり、精神的にも民衆の崇拜の対象となり聖界俗界における指導者ともなりうる⁽¹⁶⁾。またたとえばキリスト教社会においては、教会のヒエラルキーにおいて聖職者層に入るものもあれば、俗人ないし平信徒層に入るものもある。

ロマンスの世界ではもちろんのこと西欧中世において隠者というのはまず敬虔な信仰者である。「俗世の蔑視」(*contemptus mundi*) から俗世を捨てる者が多く出たのは9世紀から12世紀のことと言われる⁽¹⁷⁾。『聖ベルナルド・ド・ティロン伝』が12世紀初めのこととして伝えるところでは、当時メヌとブルターニュの境のあたりには多くの隠者たちが互いに離れて暮らしており、さながら「第二のエジプト」といったありさまであったという⁽¹⁸⁾。こうしたキリスト教の隠遁主義はかの聖アントニオスで有名な3、4世紀のエジプトの砂漠の修行者たちに源を

発する。中世ヨーロッパの隠者たちは、砂漠のかわりに、無人島やとりわけ、広大な森林を隠遁生活の場に求めたのである。ただし、オリエントにおいてすでに生まれていた共住主義(cénobitisme)にもとづく修道思想(monasticisme)はむしろ西欧で広く普及し、11, 12世紀にはクリュニー、シトーといった修道院の改革と修道会組織の発達をみている。そして散文ロマンスが発達する13世紀には都市の発達と共に、托鉢修道会が力を伸ばすのである。現実には隠遁生活への希求が退潮に向かった時もおお、おそらく聖者としての隠者崇拜は変わることがなかったであろう、隠者はロマンスの世界にとって欠かせぬ住人となったのである。

ロマンスの中の隠者

『聖杯探索の物語』(以下『探索』と略す)と『ペルレスヴォー』とはともに聖杯をめぐる冒険を主題とする散文ロマンスである。聖杯の探索といっても聖杯のありかを知っていてそこへ苦勞してたどりつくというのでもなければ、聖杯がどこにあるかをたずねて放浪するというわけでもない。ひたすら森の中を進み、その先々で出会う冒険を重ねる騎士の中で、神に選ばれたものだけについて聖杯が出現して、聖杯の神秘が開示されて聖杯の恩寵に与ることがかなうというものである。

隠者はこうした騎士たちの冒険の旅の途上にたびたび登場する。『探索』では騎士が隠者に出会う場面と同様、騎士が修道院を訪れる場面も多いが、『ペルレスヴォー』では隠者が集団として現れることはあっても修道院という言葉はない。

そうした隠者たちの経歴や生活の実態といった具体的な事実についてはあまり多くを知ることはできない。『探索』ではある隠者の亡骸を前にして別の登場人物がこの隠者について語る場面がある。その隠者は高貴な家柄の出であり、隠者とはなったものの、甥に頼まれて再び剣をとって戦い、勝利をおさめて隠者の生活にもどるが、敵方の恨みによって殺されたというのである(Quete, p. 120 sq.)。またペルスヴァルの叔母はまず隠者(recluse)という呼ばれ方で物語に登場し、隠者の生活を送るようになった経緯を自ら語っている。かつてはテール・ガスト(Terre Gaste)の領主の妻であったが、夫である王の死後、敵対者からの攻撃を恐れて、配下の者たちとともに人目につかぬ寂しい場所に礼拝堂を建てて住みついたというのである。彼女の場合は礼拝用司祭(chapelain)らと共に暮らしている(p. 73)。またこれは修道士のことであるが、負傷したメリアンが運びこまれた修道院ではその傷の程度を知るためにかつて騎士であった修道士が呼ばれている(p. 44)。

注目すべきは『探索』の隠者たちが、しばしば学僧(clerc)を伴っており、自ら司祭(provoire, prêtre)の職の資格を持っていることである。たとえばランスロが出会った隠者の一人は、学僧を伴い、教会の衣をまとって("garniz des armes de Sainte-Eglise")ミサをあげている(p. 62)。ボオールの出会った隠者の一人は物語の中で司祭と呼ばれ、やはり学僧と共に暮らしており、朝課をあげた後には衣服を改めてミサの勤めを行っている(p. 166)。こうした司祭のイメー

ジのはっきりした隠者たちは、修道院とともに、『探索』の隠者たちが世俗からは離れながらも教会という権威を背景にしていることをうかがわせるものである。

『ペルレスヴォー』の隠者は『探索』の隠者よりも多様である。最初に登場する隠者、と言っても臨終の床にあるのだが、カリクスト(Calixte)なる者は62年以上も泥棒の生活を続けた後に改心して隠者となり5年の後、死を迎えている(*Perlesvaus*, l. 204 sq.)。またある隠者はアーサー王の父のもとで、騎士見習い、そして騎士として40年を過ごしており、今や司祭であり、すでに30年以上も隠者の生活を続けている(l. 882 sq)。ゴーヴァンに宿を求められてこれを断った隠者は40年以上もその住まいに俗世の人間(homme terrien)を入れたことがないと言う(l. 2258)。さらには武具については全く何も知らず、40年以上も隠遁生活を続けている隠者がおり、彼の場合は畑仕事(labor)をしていることが分かる(l. 4184)。隠者たちの多くが老人であることは年数が挙げられなくとも、たとえば「年老いた、白髪で」(l. 1979)といった形容からもわかる。隠者たちの多くがミサをあげ、中には結婚式を執り行うこともあるが、言葉の上ではほとんど司祭とは呼ばれていない。

隠者に関して『ペルレスヴォー』の特徴の一つは物語の重要な人物の数人が隠者であることである。漁夫王は城に住んでいるが、その住まいは「漁夫王の庵」(l'ermite le Roi Pescheur, l. 941)と呼ばれている。ペルレスヴォーが最後に倒すことになる敵は「黒の隠者」(Noir Ermite)という名でよばれ、城に住み、配下の騎士をかかえている。そしてとりわけ興味深い存在がペレス(Pelles)とジョゼウス(Joseus)の父子である。物語が始まる時から、すでにペレスは「隠者王」(Roi Ermite)と呼ばれ、ジョゼウスは隠者になることを決意している。彼らが俗世を捨てることになった経緯は物語を通して明らかにされる。ペレスはある地方の王であったが、息子のジョゼウスが騎士になることを望み、それに反対する母を殺したので、「神のために領地を捨て、ある庵に入った」(l. 1080 sq.)のであり、ジョゼウスも隠者となったのである。あとで見るとジョゼウスの方は隠者となってもすぐれた武者であるところを見えるのだが、ペレスの方は畑仕事をしていることがわかる。

隠者の役割

ロマンスにおける隠者の役割について、ウィーヴァーはまず大別して世俗的なものと宗教的なものに分けた上で、前者については宿や食事の提供、負傷した騎士の手当て、死者の埋葬を挙げ、後者については聴罪司祭、助言者ないし夢の解釈者、弱者の味方、真の悔俊者を挙げている⁽²⁰⁾。またケネディは物語における重要性という点から実地的な人物(utility figure)の面と教化的人物(didactic figure)の面に分け、後者についてそれがキリスト教的騎士道の解説者から制度的なキリスト教社会の批判者へと時代と共に重点が移っていくことを指摘している⁽²¹⁾。ここでとくに聖杯の物語について隠者の役割を考える時、宗教的な勤めも含めた実際の役割を具体的にとりあげることはしない。ただし、実地的な役割のために登場する隠者であっても、

冒険の世界にとっては彼らの役割の如何にかかわらずその存在そのものに重要性があることを指摘しておきたい。

冒険の世界は森の世界である。騎士たちは森の中の旅を続けて、見知らぬ別の騎士や謎めいた乙女などに会い、また時には城や町に入ることもある。しかし地名があっても地理的な位置関係は曖昧で冒険の世界の見取り図のようなものはない。地形についても個々の自然描写というものはなく、ただ森があり、その中の野原があり、谷や川があることが語られるだけである。また時間、日数についても曖昧で、ある日についてキリスト教の祝日であることが示されたり、何かの約束に1年ないし40日といった期限が定められことがあっても、そうした数々の日付や期間から物語全体の時の流れを再構成することはできない。そこで騎士が隠者の住まいを見つけることは、騎士が人の寄りつかぬ、危険な森の旅を続けていることを読者に印象づける。『ペルレスヴォー』でゴーヴァンが漁夫王の城を訪ねる直前、あたりの土地はつぎのように描かれている。

「彼（ゴーヴァン）はこの世でもっとも美しい土地、かつて誰も見たことのないほどの美しい野原と川、数々の野獣と隠者の住まいのある森を見出した」 (...et trove la plus bele terre du mont et les plus beles praeries et les plus beles rivieres que nus veïst onques, et forez garnies de bestes sauvaches et d'ermitages, *Perlesvaus*, l. 2255-57)

隠者の住まいがあるというだけで、これから進んでいく場所が、きわめて人の近寄りがたい場所、聖なる場所であることが予告されているのである。また同じく『ペルレスヴォー』では語り手がランスロの冒険のすべてを語ることはしないという時、隠者の住まいが引き合いに出される。

「ランスロはまた自分の旅を再開し、数々の大きな森を馬で駆け抜け、多くの城と隠者の住まいを見出した。しかし物語は彼が宿をとった場所のすべてを記録することはしない。」

(Lancelot se r'est mis en son chemin et chevauche par les hautes forez et troeve recez et hermitages assez, mes li contes ne fet mie remembrance de toz les ostex ou il herberja. *Perlesvaus*, l. 3624-26)

隠者の住まいへの言及が冒険の持続を読者に印象づけるのであり、騎士が隠者の住まいに宿をとることが冒険の物語の一つのリズムとなっているのである。また『探索』の世界では隠者の存在が前提となっている。不思議な夢をみたゴーヴァンはその夢の意味を知るために

「隠者か、賢人を探しに行かねばならないだろう」 ("si est que nos aillons quierre aucun her-

mite, aucun peudome..." *Queste*, p. 151)

と言って、実際つぎに出会った若者に隠者の居場所をたずねるのである。

『探索』における隠者

『探索』の物語はまさしく聖杯の探索の開始によって始まり、その終了によって終わる。アーサー王の宮廷において円卓の騎士たちは、聖杯の隠された本当の姿を知るべく、聖杯の探索に出発することを宣言する。総勢150名はおのおの別々に旅をするが、実際に物語でその冒険が語られるのはゴーヴァン、ランスロ、ガラアド、ベルスヴァル、ボオールの5名にほとんど限られる。このうちゴーヴァンとランスロは空しく帰還し、ガラアド以下三名はコルベニク城で聖杯の儀式に加わることを許され、とくにガラアドはついに聖杯の中をのぞき見ることを許された後に死ぬ。

『探索』において聖杯の探索とは「地上的な事柄ではなくて、天上の事柄である」("la Queste n'est mie de terrianes choses, mes de celestielx", *Queste*, p. 127)。騎士たちに求められるのは武勇ではなくて信仰者としての徳である。彼らは旅の途上で出会う冒険を通して、キリストの受難の意味を知り、信仰者としての正しい生き方を学び、これを実践することを求められる。彼らに出来事の意味を教え、正しい徳を説くのが隠者であり、修道士である。ある女の隠者はランスロに、かれが探索に出発した時には罪に汚れていたのだと言い、

「いまや賢者、隠者、修道士たちがあなたをとらえ、われらが主の道においた。その道は森がそうであるように生命と緑に満ちている」("Mes maintenant te pristrent li peudome, li hermite, les religieuses persones qui te mistrent en la voie Nostre Seignor, qui est pleine de vie et de verdor ausi come la forest estoit." *Queste*, p. 144)

と言っている。森の隠者は実際的な道案内である以上に、精神の世界の案内人である。また彼らは預言者にも比せられているのであって、ある修道士はガラアドに次のように言っている。

「イエス・キリストの到来をその到来以前から告げ、彼が人々を地獄から解放すると告げていた予言者たちとまったく同様に、隠者と聖者たちが二十年以上も前からあなたの到来を告げてきた。そして彼らは、ログレス王国の冒険はあなたがやっとなければ終結しないと言ってきた。」("Et tout ainsi com li prophete qui avoient anonciee la venue Jhesucrist et dit qu'il deliveroit le peuple des liens d'enfer, tout einsint ont anonciee li hermite et li saint home vostre venue plus a de vint anz. Et disoient bien tuit que ja les aventures dou roiaume de Logres ne faudroient devant que vous fussiez venuz." *Quste*, p. 38)

隠者は神と地上との仲介者として騎士たちに聖なる騎士道を説くのであり、彼らなくしては探索の冒険はありえない。

『探索』の物語を「物語の探索」(quête du récit)と見るトドロフは、騎士と隠者との役割がはっきりと区別され分担されていることを正しく指摘している。「隠者、修道院長、女の隠者といった賢者」が意味の所有者であり、「騎士たちには知ることができないのと同様、彼らは行動すること、物語の展開に直接関与することができない」と言う⁽²²⁾。ただし、ペルスヴァルやランスロの場合のように騎士には隠者の修行そのものが求められることがある。ペルスヴァルの場合は乗っていた馬が暴走して川に突っ込んだために、危うく溺れる難は逃れたものの、「大きくて不思議で、きわめて荒涼とした山」(une montagne grant et merveilleuse et sauvage durement)で進退に窮する。彼はそこでライオンと蛇の戦いを目撃し、あやうくある女に誘惑されそうになり、ついには神に見捨てられたと思い、自らの体を剣で傷つけるにいたるが、一人の賢者によって元気づけられ、神がよこした船でそこから脱出することがかなう(pp. 91-115)。ランスロの場合はある川岸まで来たところでその川から出現した騎士によって自分の馬を殺され、水と岩山と森に「三方を囲まれて」(enclos de trois parties)進退に窮する。食べるものもなく、ひたすら神の救いを待つことになる。彼は悪魔の奸計によって誘惑へと道を踏み外すことのないよう、また絶望にいたることのないよう神に加護を祈る(p. 146)。神によって救いの船が差し向けられるのは翌朝のことである(p. 246)。ランスロが厳しい試練の状態に置かれたのは実際にはせいぜい一日のことであるが、ランスロが進退に窮したところで物語は彼について語るのを中断し、他の騎士たちの話がしばらく続くのである。したがって読者からすれば、ランスロは物語に忘れられ、久しいあいだ孤独の状態に置かれたのである。

野獣、荒れ地、誘惑、絶望と、二人が置かれた状態はエジプトの苦行者以来の修行を思わせる。このように騎士は一時的にせよ隠者の修行を求められる。ペルスヴァルはさらにガラアドが死んだ後に、サラスの城門にあった隠者の庵へ行き、隠者として一年を過ごした後に世を去る。

このように『探索』では隠者と修道士こそ騎士の案内者であり、騎士自身が隠者となることが求められているのであるが、この隠者生活の孤独とはどのようなものであろうか。『探索』はポーフィレ以来、シトー修道院との関係が推定されている⁽²³⁾。物語に出てくる修道院がしばしば「白い修道院」(une blanche abbaye)とよばれ、また隠者や修道士の説く倫理がたとえば聖ベルナルの言葉と一致しているからである。またポーフィレは探索がきわめて個人的な営みであることに注目し、それがまた修道思想と一致するものであると言っている。確かに探索の冒険は基本的には騎士一人一人がそれぞれに行うものであり、正しい徳の道を知り、それまでの罪を知ることは個人の意識においてなされるものである。しかし探索は円卓の騎士という名誉ある騎士の団によって行われている。個人的な営みとは言え、共通の目的を持った集団

を前提としている。ここに、先に隠者について見たのと同じ曖昧さがある。探索は厳密な意味での孤住主義よりは、共住主義にもとづくものである。そしてしばしば隠者が司祭であることでもわかるように、騎士と隠者の背後には共通の理念にもとづく集団の権威がある。その意味で探索はまさに修道思想の理想と一致しているのである。

『ペルレスヴォー』における隠者

『ペルレスヴォー』では聖杯をめぐる冒険の意味が『探索』の場合とは異なっている。物語はクレティアン・ド・トロワの未完の『聖杯の物語』の続編として始まり、すでに主人公ペルレスヴォーは漁夫王の城での聖杯の行列を前にした失敗の後、ベレスのもとで病の床についていることになっている。そしてすでに冒険の途上にあったゴーヴァンとランスロがそれぞれ漁夫王の城を訪ねるが、ふたりとも漁夫王の病を治すことに失敗する。ところがペルレスヴォーが再び漁夫王の城へ行く前に、漁夫王は「死の城の王」(Roi du Château Mortel)に城を奪われ、死んでしまう。ペルレスヴォーは篡奪者から城を奪い返し、聖杯は城に戻るが、謎めいた聖杯の行列は出現しない。そしてアーサー王とゴーヴァンが聖杯を見にやってくる。その後もアーサー王の宮廷での事件と並行してペルレスヴォーの冒険は続く。剣で異教徒に改宗を迫り、一族の者の恨みを果たし、ついに「黒の隠者」を倒して後、聖杯の城を去り、約束された「四つの角笛の島」(Ile aux quatre cornes)へと向かうところで物語は終わる。

ゴーヴァンとランスロが漁夫王の城で失敗するのは、彼らが世俗的な人間であり(ゴーヴァン)、王妃グニエヴルとの不義の恋(ランスロ)という罪を犯しているからである。倫理的に欠点のあるかれらが聖杯の冒険の勝者となることができず、その勝者がすでに神によって定められているのは『探索』の場合と同じである。しかし『探索』の場合のように冒険を通して徳の道が説かれるということはない。冒険の目的についてはペルレスヴォー自身が次のように言っている。

「神の教えを讀えるためになされる騎士の武勇ほど美しい武勇はない。そして他の誰よりも神のために労苦を引き受けねばならない。神がわれわれのためにみずからの体を苦しめ、悩ませ、痛めたのと同様に、めいめいがその体に苦しみを引き受けるのである」('...il n'est nule si bele chevalerie come cele est que l'on fait por la loi Deu essaucier, e por lui se doit l'on miex pener que por toz les autres; autresi com li mist son cors en paine e en travail e en exill por nos, si doit chascuns le sien metre por lui,' l. 9060-63)

そして実のところこの騎士道を実践する騎士はアリマタヤのヨセフの末裔であるペルレスヴォー一人である。こうした冒険の世界で隠者たちは実際の役割以外になにができるのであろうか。

『探索』の場合のように騎士に出来事のアレゴリックな意味が説き明かされる場面は2回しかない。ひとつは「質問の城」(Château de l' Enquête) で一団の司祭の長がゴーヴァンに話す場面(l. 2153 sq.)。もうひとつはペレスが聖杯の城の奪還に向かうペルレスヴォーに話す場面である(l. 5978 sq.)。隠者が騎士に冒険の意味について話す場面は『探索』のように一般的ではない。

しかし『ペルレスヴォー』の隠者たちが聖杯と無関係というわけではない。すべてとは言えないが、隠者はしばしば漁夫王やペルレスヴォーとつながりをもっている。アーサー王のもとで40年、そして隠者として30年を過ごした隠者は、漁夫王の隠者住まいで聖杯に仕える者である(p. 893 sq.)。彼に会ったゴーヴァンは彼が見かけは40才にもなっていないように見えて驚くが、隠者が言うには漁夫王の聖なる館(son saintisme repere)ではその安らかさゆえに一年も一月にしか思えない。彼は漁夫王の城でのペルレスヴォーの失敗を知っている。あるいはまた物語の終わりのほうでペルレスヴォーは彼の父とその兄弟たち12人の墓所のある島に行き着く。そこには12人の隠者がいてそれぞれの住まいと礼拝堂をもち、墓所を守っている(l. 9817 sq.)。

このように隠者たちのあるものはペルレスヴォーの家系、すなわち聖杯の家系に縁のある者である。そしてペレス、ジョゼウス父子はまさにその家系の者である。ペルレスヴォーが聖杯城奪還に向かう前にペレスを訪ねた時、ペレスは彼に聖杯の城がどのように守られているかを教え、戦いにおいて役立てるようアリマタヤのヨセフゆかりの白いらばと旗を与えている。そしてジョゼウスはといえば、他の12人の隠者と共にペルレスヴォーの戦いに加わるのである。

かつては騎士になることを望んでいた隠者ジョゼウスが武勇にすぐれていることは、実際に彼の住まいを襲った盗賊騎士たちを捕まえる場面で示されている。彼は隠者であるから武具をとって人を殺すことは神に禁じられているが素手で戦うことは自らに許している。彼の勇猛ぶりはランスロに、彼が騎士でないことはこの世の大きな損失であるとまで言わせている(l. 3618-19)。そのジョゼウスが聖杯城奪還に向かう隠者の一団に加わっている。隠者の一人が代表してペルレスヴォーに

「われわれはみなログレス王国へ行き、神への愛のためにわれわれの体を苦しめることを望む。かの地を奪った邪悪な王を惧れるがゆえに、われわれの住まいと礼拝堂を後にすることを望む。」(“...volon tuit aler eu royaume de Logres, metre nos cors a essil por l'amor Deu, e laisier nos edefiz e nos chapeles, par la do[tanc]le dou felon roi qui la terre a saisie”. *Perlesvaus*, l. 6104-06.)

と同行の希望を述べているが、騎士と隠者の違いこそあれ、神の教えのために自らの体を捧げようとするところはペルレスヴォーと同じである。聖杯の城の戦いにおいてジョゼウスは隠者

の衣を捨ててペルレスヴォーと共に敵と戦い、他の隠者の一団は二人の後につき従っていく。戦いに勝利した後、隠者たちは城のまわりにそれぞれの住まいをもうけ、聖杯の儀式が城で行われる時には集まってくることになる。このように『探索』で騎士が隠者の苦行生活を体験させられるのとは逆にここでは隠者が戦いに参加する。

しかし隠者のすべてがキリスト教の敬虔な信奉者というわけではない。ペルレスヴォーの最大の敵のひとり「黒の隠者」とよばれている。物語の初めの方で、「荷車の乙女」(Damoiselle du Char)は「かつて誰も見たことのないほど恐ろしくおぞましい森」にある「黒の隠者」の城で彼女が運んできた150の首を城主の配下の者たちに取り上げられる。城の中からは捕らえられた者たちの救いを求める声も聞こえる(l. 747 sq.)。物語の終わりの方でペルレスヴォーはこの城にやって来て城主を倒し、奪われていた首をとり返す(l. 9942 sq.)。物語の中でこの「黒の隠者」がルシファー(Lucifer)であり、その城が地獄を意味することが言われている(l. 2174 sq.)ように、この「黒の隠者」のエピソードは『ニコデモ福音書』にでてくるキリストの冥府下りを模している⁽²⁴⁾。

地獄の主がここでなぜ隠者とよばれているのかは不明であるが、一方に安らかな森の漁夫王と「隠者の王」ペレスがおり、他方ではおぞましき森に住む「黒の隠者」がいて善悪が対立させられているのは興味深い。これは隠者の住む場所の曖昧さ、ないし両義性と一致するからである。砂漠であれ森であれ、隠者が住まいを求めた場所は未開の地であり悪魔の住処であり、隠者はその危険を克服してゆるぎない信仰心を磨くからこそ聖者となり、隠者の住まいは聖なる場所となるのである。

漁夫王の地にあって時の流れがゆるやかであるのは、そこが異界であり、俗世と時の流れが異なるからである。ペルレスヴォーの使命は聖杯をはじめとするキリスト受難ゆかりの聖遺物と共に歴史的時間を越えてキリストの行いをそのままに行うことにあり、隠者のうちのある者は聖なる世界の人間としてこの事業に参加するのである。

隠者と騎士道

騎士道ロマンスが宗教と深く関わるようになった歴史的背景としてフラビエは、12世紀末から13世紀にかけて貴族層すなわち騎士層が、王権の伸長と町民層の台頭にはさまれて社会内での立場を脅かされたことを指摘し、聖杯ロマンスには「崇高なそして純粋に霊的な領域で自らの存在を守り、自己正当化をはかろうとする騎士層の欲求」がうかがえると言っている⁽²⁵⁾。

フラビエに従って隠者の問題を整理すれば次のように言えよう。世俗社会での力を失った騎士層が自らの活躍の場として想像のうちに求めたのは冒険の森であった。そして自らの威信を示し、力を誇示するために聖杯探索という崇高な宗教的課題を設けたのである。その世界に登場する聖職者はもちろん世俗教会の人間ではありえず、やはり世俗社会を離脱した隠者ないし修道士たちである。逆に隠者や修道士たちが登場することによってその世界が理想的な冒険の

世界として成立する。そして隠者や修道士たちの脱俗と自己完成の理想が騎士の理想となり、聖杯の探索が騎士の使命となったのである。

しかし『探索』と『ペルレスヴォー』を比べてわかるように、騎士道にとっての隠者的理想の意味は一つのものではない。『探索』における騎士道とは選ばれた騎士たちが隠者や修道士の必要不可欠な導きによって彼らと同様の個人による霊的自己完成を追求することである。

『ペルレスヴォー』の騎士道とは騎士が個人においてキリストの受難を我が身に引き受け、自らの血を流してキリスト教のために戦うことであり、実際には聖なる家系の者たちにのみ神が与えた使命である。この違いは隠者の生活の曖昧さに通じるものである。俗世を離脱し完全に孤独となってひたすら神のみとのコミュニケーションを求めようとも、そこには独善の危険があり、理想を同じくする者との連帯への欲求がある。そこに共住生活、修道院生活が生まれ、孤独であったはずの隠者は一つの集団、制度の一員となり、その集団の理想と他の人間の指導の下におかれる。二つの散文ロマンスはこの違いを反映しているのである。

注

- (1) Benedeit, *Le Voyage de Saint-Brandan*, texte et traduction de Ian Short, U. G. E., 1984, v. 1505 sq.
- (2) *Le Moniage Guillaume*, éd. W. Cloetta, S. A. T. F., 2 vol., 1906-1910, I. v. 820-934.
- (3) ルッセル (Roussel) の指摘による。Buschinger, "Le rôle de l'ermite chez Bérout, Eilhart et des dérivés de *Tristant allemand*", in *Exclus et systèmes d'exclusion dans la littérature et la civilisation médiévales*, 1978, p. 280.
- (4) *Cent nouvelles nouvelles*, éd. Sweetser, 1966, pp. 97-104.
- (5) *Les Lais de Marie de France*, éd. J. Rychner 1977, v. 891 sq.
- (6) Bérout, *Le Roman de Tristan*, éd. Muret, 4 éd., 1979, v. 2289 sq.
- (7) Chrétien de Troyes, *Le Chevalier au lion*, éd. Roques, 1978, v. 2831 sq.
- (8) Chrétien de Troyes, *Le Conte du Graal*, éd. Roach, 1959, v. 6338 sq.
- (9) Weaver (Charles P.), *The Hermit in English Literature from Beginnings to 1660*, 1924.
- (10) Kennedy (Angus J.), "The hermit's role in French Arthurian Romance c. 1170-1530", *Romania*, 95, 1974, pp. 54-83.
- (11) *La Queste del Saint Graal*, éd. Pauphilet, 1923.
- (12) *Le Haut Livre du Graal Perlesvaus*, éd. Nitze and Jenkins, 1932.
- (13) "ermite" ないし "anachorète" の訳語としては「隠者」の他に「隠修士」がある。
日本語で「隠者」といえば「俗人との交際を絶って山野などにひっそりと隠れ住む人。隠遁者。隠士。」(広辞苑)であり、たとえば鴨長明のような草庵住まいを思い浮かべるが、フランス語の "ermite" ないし "anachorète" はもっと厳しい修行者、たとえば密教の「修験者、山伏」に対応する場合も含むであろう。
- (14) 隠遁主義、修道思想の歴史については、主に Lozano, "Hermitism" in *The Encyclopedia of Religion* (M. Eliade, editor in chief, 1987), 今野国雄『修道院』(近藤出版社, 1971)を参考にした。
- (15) 考古学者のユベールは「12, 13世紀の érémitisme individuel は統計学的のみならず歴史的にも捉えがたい」と言っている。Jean Hubert, "L'érémitisme et l'archéologie" in *Arts et vie sociale de*

la fin du monde antique au Moyen Age, 1977, p. 221.

- (16) 渡辺昌美はヨーロッパ中世の隠者について「逆説めくが社会からの離脱を選んだこれらの隠者は、実は極めて社会的な存在となる。世の常ならぬ清貧と貞潔に生きる者に、徳を感じた民衆が訪れて、あるいは説教を乞い、あるいは日常の助言をもとめるからである」と言っている（堀米庸三編『生活の世界歴史6 中世の森の中で』, 1975, p. 227）。またユシェはクレティアンの『イヴァン』に出てくる隠者について「逆説的ながら、孤独と沈黙のうちに自らの償いをしていると思われる者が、むしろ言葉の人（homme de parole）、社会や言葉との結びつきを取り戻させる真実の言葉をもたらし人となって現れてくる」と言っている（Jean-Charles Huchet, "Les déserts du roman médiéval — le personnage de l'ermite dans les romans des XII^e et XIII^e siècles", *Littérature*, 60, 1985）。
- (17) Jacques Le Goff, "Le désert-forêt dans l'Occident médiéval", in *L'imaginaire médiéval*, 1985.
- (18) Duby, *L'Europe au Moyen Age*, 1984, p. 30.
- (19) ジョゼウスによる母親殺しは、クレティアンの物語でのペルスヴァルによる母親殺しのモチーフ（ペルスヴァルの母は息子が騎士になるべく自分のもとを出立した悲しみのために死ぬ）がここに移されてきたと考えられる。『ペルレスヴォー』では主人公の母親はかれの出立後も生きており、物語に登場してくる。Cf. *Perlesvaus*, éd. Nitze and Jenkins, tome II, p. 243.
- (20) Weaver, *op. cit.*, p. 77-105.
- (21) Kennedy, *op. cit.*
- (22) Tzvetan Todorov, *Poétique de la prose*, 1971, p. 131-132.
- (23) Albert Pauphilet, *Etudes sur la Queste del Saint Graal*, 1980 (Réimpression de l'édition 1921), pp. 53-84.
- (24) *Perlesvaus*, éd Nitze and Jenkins, tome II, p. 233.
- (25) Jean Frappier, "Le Graal et la chevalerie" in *Autour du Graal*, 1977, p. 93.